

風姿花伝その二

物學のいろいろ  
物狂

これは能の面白さが最もよく発揮される、この道一番の芸能である。演ずることが出来る**物狂**の種類が多ければ多いほど、この道の達人と呼ばれるようになるにつれて、そのことが芸能全般の広がりや深みなど、あらゆることの向上につながるようになっていく。したがって物狂は、くりかえしくりかえし工夫をしながら、**公案**を重ねて**嗜む**ようにしなければならぬ。何かの霊が乗り移った**假令**や**憑物**の数々、神や仏、**生霊**や**死霊**のたりなどは、その憑物のありよう、なにがどうして取りついているかなどを学べば、それを手がかりにして容易に演ずることが出来るけれども、親と生き別れた者、失った子供を探し求める者、夫に捨てられた女や、妻に先立たれた者などの、それぞれの想いがなせる狂乱の物學は、大變に大事であって、よほど上手な為手であっても、それぞれの物狂の心をよく分らずに、どれも同じように、ただ単に狂って見せたりなどすれば、やればやるほど、観る人の感心からは遠ざかってしまう。想いがその人を狂わせているわけだから、肝心なのはその想いであって、何が大事といって、何かを想うその気色を何より大事にし、それが狂にいたるところを**花**にあて、心を入れて狂えば、観る人々の感所も、**見所**も、自ずと定まってくる。そのような演り方で、もし人を泣かす場所を作りだすことが出来れば、それこそ**無上の上手**だということを必要がある。このこと、心の底から、深く思いつらなければならぬ。

大体において、物狂いを演じる際の出立は、対象に似せるようにすることはもちろんだけれども、しかし、場合によっては、物狂いを演じているのだということを手く使い、ひととき花やかに舞台に出で立ち、**時の花を挿頭**したりすると良い。

さらに言っておかなければならないが、物狂の場合は、物まねをするにあたって心得ておかなければならないことがある。物狂は、**憑物の本意**、すわなち狂うわけがあつて狂っているのだが、たとえば女の物狂いなどをまねる場合に、戦闘の化身とも言うべき**修羅**や**闘諍**や**鬼神**などが憑いたように為すことは、何よりも悪いことである。憑物の本意を演じようとして、女の姿で怒りを表したりなどすれば**見所**が見当違いのものになってしまうし、だからといって女であることを本意とすれば、憑物を演じていることにならない。また男の物狂で、女が憑いているような場合も同じであつて、すなわち、あまり形にとらわれないのが**秘事**であるといつて良い。もしそうするように能の本に書いてあるとすれば、それはその本を書いた人の考えが浅いからであり、この道に長じた書き手であれば、そのように似合わないことを書くことはないと思われる。また、そのようなことを自分で考え、公案を尽くすこともまた秘事であり、上手くなる秘訣であるといつて良い。

また面をつけない直面での物狂いは、能を極めた為手でなければ、十分に演じきれぬわけがない。いうまでもなく、顔の表情、気色そのものがいかにもそれらしくなっていなければ物狂いに見えるわけもなく、上手いかならないからといってむやみに表情を変えたりなどすれば、それはそれで見られたものではない。これは申樂の奥儀ともいふべきことであつて、物まねが必要な、大事な申樂に初心者であてたりするのは考えものである。能の一大事としての直面、もう一つの大事としての物狂い。この二つの大事な色を一つの心で織り成して、それでなおかつ面白いところに花をあてることが、どれほどの**大事**か。それを思えば、よくよく稽古をするにいいにない。